

Leon Hurvitz:

智顓 (Chih-i)

An Introduction to the Life and
Ideas of a Chinese Buddhist Monk

安藤 俊雄

数年前京都に留学してシナ佛教を研究し、現在ワシントン大学に在るハービッツ氏が最近 Bruxelles の L'Institut Belge des Hautes Études Chinoises から刊行されている *Mélanges chinois et bouddhiques* の一九六〇—一九六二年号に上記の研究成果を発表した。聞くところによればこれはハービッツ氏の学位請求論文であるという。三百七十二頁に亘るなかなかの大著であって、内容も単なる Introduction ではなく著者独自の新しい研究の成果が随所に散見され、天台学研究に寄与する点も多い。古来欧米の佛教学者にして天台研究に従事したものは極めて少く、まとまった研究を刊行したひとは一人もなかった。したがってハービッツ氏のこの研究が欧米人の本格的な天台研究の最初の出版であると云える。われわれ日本の学者の間でも天台を研究する場合、難解な漢文を解説することと深淵な天台教義の意味を捉えることという二重の困難を覚悟しなければ

ばならないが、ハービッツ氏はすぐれた語学の天才であって、わたしも初対面のときその流暢な京都弁に喫驚したほどである。本書では多くの日本の学者のみならず独佛その他の研究資料が豊富に参照されており、梵蔵蔵のテキストからの引用も頻繁に行なわれている。以下本書の内容について少しく紹介と批評を加えてみたいと思う。

本書は三篇に分かれており、第一篇では智顓の天台学が出現するまでのインド及びシナの佛敎思想史の展開について概説し、第二篇では智顓の生涯について、第三篇では智顓の思想について論述している。第一篇では先づオルデンベルグの学説に基いて佛陀の根本佛敎において、哲学的な思索や論議などが重要な地位を占めておらず解脱の体験こそ最も重視されたとし、特に佛陀の沈黙の意義について述べ、続いて佛陀の滅後バラモン敎その他の学派に対して佛敎を弁明するために哲学を佛敎に取り入れることによって、部派佛敎の対立を生じ小乗佛敎なるものが成立した経過を述べ、主として有部の教義を説明する。この点についてヨーロッパの佛敎学研究を豊富に引用しているが、発智六足の七論の原型のすべてを佛陀の直弟子たる大迦旃延子 (Mahākātyāyanīputra) が撰述したものであるというのは少しく奇異に思われる。また有部の五位七十五法を説明するところで非摂滅無為を涅槃とするのは妥当ではない (p. 13)。さて、著者は小乗につづいて大乘思想の説明に入り、大乘に中観派と瑜伽派の二大系統が分れたが、瑜伽派の思想は天台智顓に大した影響を及ぼしておらず、最も智顓に大きな影響を与えた中観派

の思想を主として Murthi の Central philosophy of Buddhism に拠りながら可成り詳しく論述している。

つぎに著者はいよいよシナ佛教の展開の論述に入り、漢魏兩晉南北朝の佛教思想の發達を述べるのであるが、著者の佛教研究の専門領域であるだけに日本・シナ・欧米の学説を豊富に引用批評するのみならず、著者独自の新しい見解も随処に見られる。論述の重点は特に支遁や苻秦の釈道安・羅什・僧肇などの思想、及び南北朝期の南北兩地の学風の相異などの説明におかれており、主に湯用彤の漢魏兩晉南北朝佛教史に負うところが大である。しかし上に述べた如く著者の新説も随所に見られる。その主なものを挙げれば、第一に支遁の即色論と出三藏記集所収の支遁の撰とされている大小品対比要鈔序を比較し、後者に道家の思想影響が顯著であるに対して、即色論は当時としては中觀派の ontology を最も正しく解釈したものであるから、両者は同一人の撰述ではあるまいと推定している (p. 53註)。とくに興味深く感じたのは羅什の項のところでもパークレイの Alex Wayman 氏の 智度論羅什撰述説を紹介している点である (p. 67、註 3)。ウェイマン説によれば、若し龍樹が智度論を著したとすれば月称などが論書のなかで引用したり言及すべきであるのに少しもその形跡がないし、大体龍樹の生存した第二世紀の頃はまだ短い偈頌を口伝するという習慣が続いており、釈論を書いたとしても現存の智度論とは比較にならぬほど短いものであった筈である。もし智度論が龍樹の著作であるとすれば当時における長大な釈論の嚆矢といふべきであるが、大品般若経自体が

通俗的な説明の形式で書かれているから、もしこの経の釈論が必要となったとすれば、それは相当の期間を経て大品般若の理解が容易でなくなったときでなければならず、龍樹が大品般若の釈論を書くとすればもつと智度論の現存のものとは異つたものであったにちがいない。しかも智度論のチベット訳もないことは不可解と云わねばならぬ。第八世紀以来チベットには中觀派の学者が頻りに龍樹系の論書の翻訳を行ったから、もし智度論が龍樹のものであるとすれば、かかる大部の論書を翻訳しない筈はない。これらの理由によって Wayman 氏は智度論を龍樹の著作ではないと断定するのである。この見解は主として智度論の著者が何人であるかについてとくに本論の型体や中觀派の論書に言及されていないという外面的事実から龍樹撰述を否定するものであって、干潟博士の智度論の内容分析に基づく研究と併せて考察するとき興味深い意見である (印度学佛教学研究、第七卷第一号、干潟龍祥、「大智度論の作者について」参照)。

このようにハービッツ氏の論述は各国の研究論文や学説を広く豊富に参照しているのでいろいろわれわれにも参考となる点が多いが、大体において湯用彤の前掲書の大綱にしたがっているほかは日本の佛教史研究に拠つたものであって、とくに、境野黄洋・常盤大定・板野長八・塚本善隆・横超慧日など諸氏の研究に基くところが多く、ことに塚本博士と横超博士には特別の深い指導を受けた。著者の魏晉南北朝の佛教に関する論述が正確であり得たのはとくに両氏の指導に負うものであろう。著者は最後に天台智顓の恩師慧思の思想を概説して第一編を終るの

である。第一編のシナ佛教思想史の展開に関する著者の論述は全般的に云えば概ね穩健着実であって日本・シナその他の諸國の關係論文を広く参照しており、とくに不満を感ずる点は見出不される。しかし強いて希望を云えば慧思と智度論との關係が看過されているために南岳天台の源流についての究明が欠けていると思われる。慧思が師事した北齊慧文以來智度論がこの系統の諸師の思想に重大な影響を及ぼしたことは、文師用心一依釈論という摩訶止觀の記録、及び慧思に釈論玄義の著があったという事実、また智顛にも智度論の講説と著作があったという事実などによって明瞭である。ハービッツ氏は僧肇によって羅什が將來したインドの大乗思想をば老莊の哲学思想を援用することによって漢民族の文化のなかに正しく受容せしめたことが、やがて隋代に天台や三論が興起した大きな動因であると云う(P. 73)、南地の僧朗・僧詮・法朗・吉藏などの三論系の諸師の思想を詳しく紹介しているが、北地の佛教についてはたゞ禪・淨土・三階の三宗の実践的な諸宗のみを問題とし、慧思の思想をその最後に挙げておらずにすぎない。これは氏が当時の南地の佛教と云えば佛教の理論的哲学的研究を重視し、北地の佛教が逆に習禪や信仰など実践的な修道を重視する風習にあったという見解にしたがったものであり、その見解そのものは決して不当ではないが、それだけでは慧文・慧思・智顛の学系の根源を明らかにすることはできない。南岳天台の源流は三論系よりもむしろ智度論を根本的立場とする北地の原始四論宗のなかに求めるべきであると考える。北魏の道場(道長)は慧文や慧思の

時代には北齊の主都鄴にあって智度論を講説し、その門に多数の学徒が集まりこれによって四論宗が生れた。北齊慧文の智度論研究もこの一派と何等かの關係があったのではないかと推定される。慧思の禪体系には法華經安樂行義に説く法華三昧のみならず、随意三昧や般舟三昧も大乘の三昧として提唱されており、諸法無諍三昧法門では天台のいわゆる漸次止觀も提唱されている。したがって慧思が円頓止觀のみならず漸次止觀をも説いていることは明らかである。これは智度論の次第行と不次第行の思想に基くものであって、天台の三種止觀の体系の原型ともいべきである。慧思が北地の主禪思想の影響を受けていることはいうまでもないが、さらに嚴密に云えば、智度論に拠って全佛教の止觀を体系的に組織しようとする構想を抱いていたのであって、この構想を三種止觀の体系にまで完成したのが智顛であるから、禪・淨土・三階教の三宗よりも北地の原始四論宗の学系を重視すべきであったと思う。

さて本書の第二編では智顛の生涯を史実に拠って精密に究明している。まず智顛の幼少期の家庭環境や梁朝の廢滅の過程、陳朝の成立事情、智顛の出家前後の事情などを国清百録・別伝・統高僧伝のほか梁書・北周書・南史など正史の記録を縦横に駆使して克明に論述している。このような研究方法は著者が主に塚本博士の研究から学んだものであって、智顛がやがて陳や隋の朝廷や高官達から特別の厚遇を得るに至った理由の一面を明らかにし、智顛の幼少期の社会的背景を知るために是非とも欠くことのできない有効な方法である。そこで梁末陳初の帝王、

高官の政治的立場や国運の変動の事情を丹念に説明している。著者はこれら一般社会史の論述に当っては主に Franke, Otto: *Geschichte des chinesischen Reiches*. をしばしば参照している。

つぎに論述は金陵に入京し天台山に入るまでの智顛と直接関係のあった僧俗の知名の人々、すなわち沈君理・徐陵・王固・毛喜・法濟・建初寺宝瓊・警詔などの身分や経歴を詳細に説明し、さらに智顛が金陵を去って天台山へ入山する動機及びそれと関聯のある北周及び北斉の破佛の顛末を詳しく説明している (p. 118)。ただ著者が金陵滞在のときの講説について次第禪門や法華経題の講説のみを挙げ、六妙法門の撰述を無視しているのは遺憾である。周知の如く六妙法門は天台のいわゆる三種止観の一である不定止観を説いた唯一のものであるから、天台止観の体系にとって欠く可からざるものであるのみならず、本書には初期においてすでに智顛が円教の思想について可成り具体的な構想を抱いていたことを指示する学説が説かれているから、きわめて貴重な意義をもっている。

さらに著者の論述は華北に於ける隋朝の成立や天台山隱棲時代の智顛の動静に及び、山麓始豊県からの援助、修禪寺の建立、沿岸漁民に対する放生の奨励、普明や灌頂の入門、永陽王の入山、陳朝からの再度入京の懇請の事情などを説明している。また一方で北地の政治状況の変動に注意を向け、やがて智顛と深い関係をもつ隋朝の成立の模様を説明するとともに、他方に陳朝と智顛との交渉を明らかにしようとする手法はなかなか巧妙

であり、智顛と天台宗の運命を陳隋の政治的軍事的な視野において把えようとしたものとして興味深い。しかしはじめて智顛が天台山に入って後に行つた華頂峰の修行や開悟を無視しているのは何故であろうか。華頂開悟は大蘇開悟とともに智顛の思想転換に重大な影響を及した事件であつて古来天台学界で重視されている。ハービッツ氏は大蘇開悟については言及しているが、華頂開悟には少しも言及しない。わたしは晩年の円熟した天台教学の根本原理はこの華頂開悟から生れたものと信ずるので、これは決して軽視すべきではないと思う。

さて著者の論述はさらに智顛の第二回目の金陵の講説、隋軍の南侵、晉王広と智顛との交渉、南岳から荊州への旅行、揚州での動静などを記述し、特に江都から智顛が天台山に還つた時期を考究している。別伝では智顛が揚州から天台山へ出発したのと、晉王広が揚州から長安へ出発したのが同時であるとし、戒応の年譜ではこれを開皇十六年の春とし、志盤の佛祖統紀は開皇十五年の九月とし、現今の学者の間でも異説が唱えられているが定説というべきものはまず出ていない。しかるに著者はこの問題を解決するために国清百録を徹底的に検討し、特に関係史料として国清百録卷三及び卷四所収の智顛と晉王広の間に交された六通の書簡を発信の順序にしたがって排列替えを行い、第五十八答施物書、第五十六答度人出家書、第五十九王迎入城礙雨移日書、第一百蔣山棲霞寺保恭請書、第六十一王迎入城書、第五十七放徒流書の順にあるべきものとし、これらの書簡は何れも揚州において書いたものであり、第六通の智顛が晉王広に宛

てた答放徒流書に十月十六日とあるのを卷四所収の第一百一秘書監柳願言書の内容と対照して、結局智顛が天台山に還ったのは開皇十五年 (A.D. 595) 十月十六日以後であると断定したのである。智顛の生涯を記述するに当って著者は国清百録を精密に分析し、その成果を基礎として智顛の足跡を正確に究明しようとした。かつて著者は京都大学の吉川博士の指導の下に国清百録の解説に多大の努力を注入したと聞いていたが、その努力の成果がこの第二編の智顛伝の研究において明瞭に結実している。だから本書全体のなかでもっとも光っているのは第二編であると云っても過言ではない。

第三編の Chih-i's idea のところではまづ法華経各品の概要を説明し、次いで異訳の法華経を挙げる。(p.189, 註4, b)。次いで智を法京とするのは法経の誤りであろう(p.189, 註4, b)。次いで智顛以前における法華学の歴史を述べ、特に竺道生の思想を詳しく紹介している。しかしここで湯用彤氏の説に拠って大乘の般若の空思想と常楽我浄を説く涅槃経の思想の相違を挙げ、大いにこれを強調しながら、しかも両思想が中観佛教と涅槃経の学者である竺道生においてどのように統一されたかという点について少しも言及していないのは残念である。ことに羅什が法華経を佛陀の最後の説法であると考えたのは、大般涅槃経の存在を知らなかったか、それとも涅槃経を非佛教的な異端思想を説くものであると考えたためであって、智顛の涅槃経に対する態度もこれと同じであるというの(p.191註)、必しも賛成できない見解である。けだし羅什は論外として智顛に関する限り涅槃

経に関する関心はきわめて深く本経をば法華経と同じく醍醐味に相当するものとし、未熟の者を拮拾するために四教を重説し、末代の悪見の衆生のために慧命を傷つけ法身を亡失せしめざらんがための扶律談常の教であると説いているのであるから、智顛において涅槃経が大乗中観の思想とは異質の系統に属するという見解などは全然存在しなかった筈である。ハーヴェン氏は次の如くいう。The Mahāparinirvāna contradicts some of the cardinal ideas of Buddhism in its view of nirvāna.

For both the Hinayanists and Mahayanists the state of nirvāna was something devoid of attributes, past expression. This scripture, on the other hand, specifically declares it to be "permanent, pleasant, personal, pure" (常楽我浄) (p.194) 小乗や大乘の涅槃がすべての expression を超越しているというのはよいが、attribute のないものであるという解釈は妥当であるだろうか。大乘の色即是空・空即是色の原理から云えば、空性というものは但空ではなく不但空であり、色の差別への執著を離れるとき色の当相当処がそのまま空性の実現、すなわち涅槃である筈である。とくに円熟した大乘教理、例えば中観佛教において涅槃が四句百非の限定を超越していると強調されるのは、涅槃の内容を negative に表現したにすぎないのであって、それは涅槃が単なる虚無であることを主張するものではなかった。いま大般涅槃経において常楽我常が説かれても、それは涅槃の内容を positive に表示したにすぎないのであって、中観系の般若学と涅槃経の立脚する基本原理

は同一である。摩訶止観の初頭で灌頂が智顛の思想と中論の空思想の相違について「中論は遣蕩し止観は建立す、云何が同ずるを得ん。然るに天竺に論を注するものに凡そ七十家あり、応に青目を是とし諸師を非とすべからず、又た論に云く、因縁所生法、我れ即ち是れ空なりと説き、亦た是れ仮名なりと為す、亦た是れ中道義なり」と述べ、中論も単に空の遣蕩の面を説くのみでなく、仮と中の建立を説くがゆえに、龍樹の中観と智顛の思想が決して異なるものでないことを強調しているではないか。湯用彤氏の説にしたがって中観派の般若思想と涅槃経との教説の表面上の相違点に着目し、実際に涅槃経の伝訳によって古来の小乗的な神不滅の思想と佛性を結びつけようとした一部の思想が存在したこと、竺道生がこの思想に対して始めて般若字と涅槃経とを融合し、両系統の思想の同一であることを説いた事実を挙げることにしている。わたしも賛成であるが涅槃経のなかに非佛教 (unbuddhist) 的な思想があるとか羅什や智顛がその点において涅槃経に対して批判的であったという見解については少しく疑問を感じる。

つぎに著者は智顛の法華経観を天台三大部によって概説する (p. 205)。まず玄義 (Hsuan i) については日下大癡氏の台学指針にしたがって五重玄義の解説を行い、とくに本迹二十妙などについて簡単な解説を加え、つづいて天台教判の論述に入り、楞伽経や涅槃経に基いてインドにおける教判を概説し、ついで南三北七を中心とするシナの教判の成立過程を述べ、智顛の教判の論述に及ぶ (p. 229)。まず五時判を解説し、第五法華涅槃時

のところではアラカンに対する羅什と智顛の学説の異同を究明し、羅什がアラカンを架空のものと考えたのに対し、智顛がそれを実在するものと考えたとか、或いは羅什が法華経を佛陀の最後の説法であると考えたのに対して、智顛においては法華経が佛説の究竟を説くもので、涅槃経は最後の説法であるとしても法華経の補助としての意義をもつにすぎぬと考え、羅什が厳格な中観系の学者としてどこまでも小乗やアビダルマ佛教を無用のものであるとしたのに対して、智顛はアラカンをどこまでも実在なりとし、したがって小乗佛教にも存在意義を認めようとした syncretist であると批評している点はすこぶる興味深い (p. 241-243)。しかし宋元粹の四教儀備積の説によって五時説法の年時を限定しているのは必しも正当ではない。次いで化儀四教を簡単に説明し、化法四教の説明に重点をおき、藏通別円の四教を苦集滅道の四諦の部門に分け、主として大本四教義によって説明する。しかし著者が努力を集中しているのは円教の解説である。ここでは先づ円教の行位を簡単に説明し、つづいて天台実相法門の精華たる一念三千 (The trisrichicosm in a moment of consciousness) を詳説し、この法門の根拠である法華経方便品の経文、すなわち舍利弗、如来知見広大深遠… ；所以者何、佛所成就第一希有難解之法、唯佛与佛、乃能究竟諸法実相、所謂諸法如是相、如是性、如是体、如是力、如是作如是因、如是縁、如是果、如是報、如是本末究竟等の十如是の文について Kern 南条本の梵本に拠って Burnout 訳、Kern 訳、竺法護訳、羅什訳及び法華論などを対照し、新しく著者自

身の正訳を試み、妙法華の方便品の十如を説く文のみならず智度論全体の著者をば羅什であると断定した (P. 280, 281註)。

著者は続いてこの天台実相法門の詳細を解説するために三大部を考察し、先づ文句では卷三下の約十法界、二約佛法界、三約離合、四約位の四番釈について述べ、次に妙玄の三法無差の解釈を紹介し、衆生法のところで十界互具、百界千如の法門を解説し、さらに四趣・人天・二乗・菩薩及び佛法界に分けて十界の十如の一々について詳説する。最後に摩訶止観に入つて不思議境たる一念三千の実相の構造を解説するために三途・三善・二乘・菩薩・佛の十法界の十如や三世間や四土を説明し、特に一念三千を説く摩訶止観の本文を引用し、それにしたがつて不思議境の本質をくわしく解説している (P. 302)。

最後に著者は天台止観に言及しているが、天台止観の体系に漸次・不定・円頓の三種止観があるなかで、ただ円頓止観のみを問題とし、それも四種三昧・二十五方便・十境・十乗の項目を羅列し、それにきわめて簡単な解説を加えているのみであつて、詳細な研究を後にゆずっているので、とくに注意すべき点は見当らない。ただ異様に感ぜられるのはハービッツ氏が十乗観法の適用規定について、上根のひとが観不思議境の一法を修するのみで証悟を得るのに対して、中根がときには観不思議境と起慈悲心の二法を修め、下根のみ十法全体を修行すべきである (p. 327) 'Of the ten modes, the first alone suffices for a person of sharp faculties, the first two for a person of somewhat duller faculties, and so on down to the

person of dullest faculties, for whom all ten modes are necessary and indispensable' 云々、ときには中根の能力のひとはその能力に応じて観法を多く修行すべきであるとし、中根の人が九法を修行するかの如く説明している。The person of sharpest faculties requires only the first, the one of dullest faculties requires all ten, while persons of intermediate faculties will require a number of modes in inverse proportion to the sharpness of their faculties (P. 330) これによると著者は中根二法、または中根九法説を主張していることになるが、一体何を根拠としたのであるか。古来天台学界では唐の湛然以後、上根一法・中根七法・下根十法の説が最も有力に行われている。しかし実際には学界のなかに必しも中根七法説にしたがわずに中根六法説を主張する学者もあるし、智顛の摩訶止観も観境に応じて中根の修むべき観法の数量も異なるのであつて、決して一義的に中根がいつでも二法とか六法、あるいは七法を修むべきであると限定すべきではない。しかし摩訶止観のなかに中根二法や中根九法を説く文は全然見当たらないが、一体著者は何を根拠にして、これらを唱えるのであろうか。この点については日本佛教学年報第二十四号の拙稿「円頓止観の研究」(十乗観法の修行規定について)を参照されたいと思ふ。

要するに本書は智顛の生涯とその思想のうち天台の実相門の教義を概説したものであつて止観法門については簡単な輪郭を簡条的に指示しているにすぎないから、この止観法門をさらに

詳しく説明しなければ完全なものとは云い得ない。しかし難解な漢文の資料を広く渉獵し、国清百録その他を精密に解説して智顛の足跡を明確に把握し、正史の記録を追求して智顛と関係のあったひとびとの経歴や地位を明らかにすることによって智顛の当時に於ける權威が如何なるものであったか、また智顛の及ぼした影響がいかに広範圍に亘ったかを正確に指示している。しかも一念三千とか百界千如など天台独特の専門用語を英訳し、天台教義の概要をまとめて英文によって説明したのはハービッツ氏の功績であって、本書によって従来どちらかと云えば外国の佛教学者には未知の領域であった天台の教義が広く世界の学者の前に公開されたことになったと云っても過言ではない。しかもただ天台教義の専門学者ばかりでなくシナの佛教思想史を研究しようとする外国の学者にとっても必読の書となるであろう。

う。それは本書の研究が智顛を中心とするシナ佛教思想の展開を主題とするものであると云ってよいほど広い視野のなかで智顛の生涯と思想を追求するところに特色をもっているからである。数年前にオランダから出版された H. Zurcher 氏の Buddhist Conquest in China とともに併せて読むとき現今における外国のシナ佛教研究が今までよりはるかに進んでいることが知られる。とくにハービッツ氏のこの研究の場合、いままで固苦しい漢文を通して公式的に天台の教義を理解しようとする傾向が強かったため、それだけに天台教義というものが無味乾燥の印象を与えがちであったが、英文で表現されたのを見ると、また異なった新しいやわらかな感じが生れ、新しい思想に接するような気が湧いてくる。そのいみで本書は日本の学徒にも一読をおすすめしたいと思う。